愛のかたち　　ルカ 2:1～7

私たちはアドベントに四本のキャンドルを灯して礼拝をしてきました。最初のキャンドルは「希望」、次は「平和」、三本目は「喜び」、そして、四本目のキャンドルは「愛」を表わしています。

四本のキャンドルが表わす「希望」、「平和」、「喜び」、「愛」はどれも、生きていくのに必要で大切なものばかりです。人は希望なしには生きていけません。また、平和がなければ生きた心地はしませんし、喜びがなければ生きていることが虚しくなります。そして、愛がなければ生きることは苦痛でしかなくなります。皆さんも希望を失くしたときの惨めな思い、人間関係が壊れたままで過ごさなければならないやりきれなさ、何をしても喜びを感じられないわびしさ、愛を感じられない痛みと辛さを、一度や二度は味わってこられたのではないでしょうか。

聖書に「野菜を食べて愛し合うのは、肥えた牛を食べて憎み合うのにまさる」箴言 15:17 という言葉があります。本当の愛で結ばれていなければ、たとえご馳走があってもそれは役に立ちません。けれども、愛があれば、わずかなものしかなくても、みんなで分けあって楽しく食べ、心まで満たされることができます。「温度計で測れない温かさ」という言葉があります。部屋の温度は温度計で測れます。でも、その部屋に集まった人々の温かさは、温度計では測れません。暖かい部屋に暖かい飲み物や食べ物がふんだんにあったとしても、そこに「温度計で測れない温かさ」が欠けていたら、人は心に温かさを感じることがないでしょう。あり余るほどのものに囲まれながら、心が満たされずに生きている人がなんと多いことでしょうか。ご馳走をまるで砂を噛むような思いをして食べている人の数も数えきれないと思います。大勢の人の中にいながら孤独を味わっている人が私たちの身近にも大勢いると思います。動物は、環境さえ整えばどこででも生きていけるでしょうが、人は、愛がなければ、その温かさを感じることがなければ、本当の意味で生きていくことができないのです。

アドベントの四本目のキャンドルは、人が生きていくのに無くてならない愛を示しています。そして、その愛とは、神の愛だと言っています。その神の愛は、今から二千年前のベツレヘムで表わされました。それで、愛を表わすキャンドルは「ベツレヘムのキャンドル」と呼ばれるのです。では、ベツレヘムで表わされた神の愛とは、どんな愛だったのでしょうか。

それは第一に「永遠の愛」です。イエスがベツレヘムでお生まれになったのは、偶然ではありません。それは、神のご計画であり、預言の成就です。ヨセフが出産間近のマリヤを連れてベツレヘムに向かったのは、ローマ皇帝の人口調査のためでした。それぞれ、出身地に戻って登録をするためです。当時の「人口調査」は現代の国勢調査とは全く違います。それは、ローマ帝国が人々を自分の支配のもとに置き、税金を取るためでした。確かにイエスがベツレヘムでお生まれになったのは、ローマの権力によって強制されてのことのように見えます。しかし、実際は、神がローマ皇帝の上におられ、ローマの権力を用いて、預言を成就されたのです。何故ならそのことは何百年も前に預言されていたからです。

旧約聖書のミカ 5:2 に「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。」という預言の言葉があります。神は救い主をダビデの子孫から起すと約束されていたのです。ベツレヘムはダビデが生まれたところです。御使いは羊飼いに「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」ルカ 2:11 と言いましたが、「ダビデの町で」という言葉の中に、ダビデから千年近く経っても、救い主を与えるとの約束を守り続け、それを成就してくださった、神の変わることのない愛が言い表わされているのです。

人の愛は移り変わります。「最初の愛、いつまでも」というわけにはいかないのが、人の世の現実です。しかし、神の愛は違います。神は言われます。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」エレミヤ書 31:3　私たちは洗礼を受ける時、教会の一員とされた時に神様に約束するわけですがいつの間にか守れなくなってしまっていることが多いものです。しかし人が神との約束を忘れても、神は人との約束を忘れません。神は、限りない愛、永遠の愛、とこしえの愛で人を愛してくださいます。神の愛は永遠の愛です。

神の愛は、第二に「へりくだりの愛」です。「へりくだりの愛」というのは少し変わった言い方ですが、聖書は、神の愛をそのような言葉で表現しています。ピリピ 2:6-8 にこう書かれています。

「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」神の御子であるお方が人となられる。これ以上のへりくだりはありません。しかも、イエスは、人としても、最も低く、貧しい者となられたのです。

御使いは「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」ルカ 2:11 と言ったあとで「あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」ルカ 2:12 と言っています。「このかたこそ主キリストである」という宣言と「幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてある」という言葉は、なんとも不釣り合いです。神の御子であるなら、王宮に、あるいは神殿に生まれ、特別なベビーベッドに寝かせられて当然なのに、この尊いお方が、人の住むところではない、家畜小屋の飼葉おけに置かれたというのです。

パウル・ゲルハルトと J. S. バッハの作った「馬槽のかたえに」をさきほど賛美しました。都合 2 節を歌いましたが第 5 節目の歌詞はこうなっています。

この世の栄（さかえ）を望みまさず
われらに代わりて悩み給う
貴（とうと）き貧しさ　知り得しわが身は
いかにたたえまつらん

「貴き貧しさ」とはじつに、イエスのご生涯のすべてを言い表わしている言葉です。イエスが貧しくなられたのは、私たちに豊かな命を与えるためでした。イエスはご自分を低くし、貧しくし、ついに十字架の死にまで至られました。イエスは求める者にご自分を与え続け、ついに十字架の上でご自分を与え尽くされました。神の愛は、自らを低くし、貧しくし、他に与える愛です。私たちは、この愛によって生かされ、また、この愛に生きることによって、ほんとうに幸せになれるのです。

もし、私たちが、キリストの「へりくだりの愛」を本当に知ったなら、私たちも本当の謙遜を身に着けることができるでしょう。そして、それができたら、夫婦や家族の間だけでなく、どんな人間関係においても、お互いを高め合うことができるようになるでしょう。クリスマスにベツレヘムの家畜小屋を思い浮かべるたびに、神の御子がどんなにへりくだられたかを学びたいと思います。

第三に、神の愛はかたちをとった愛です。今日のメッセージのタイトルでもあります。「神さまの愛と言っても、すごく漠然としていて、掴みどころがない」と言う人も多いでしょう。確かに、「愛」という言葉は、男女の愛を言うときにも、肉親の愛を言うときにも、また、「愛国心」と言って、国家への忠誠を言うときにも使われます。「愛」と言っても人によって定義が違い、漠然としている、神の愛と言われ

ても、どう捉えたらいいか分からない。そんな気持ちは、多くの人が理解出来ると思います。いや、神は、そうした私たちの気持ちをもっとよく理解していらっしゃいます。

ですから神は、ご自分の愛をかたちをもって表わされました。ベツレヘムの飼葉おけに寝かせられた赤ん坊は、「神の愛の結晶」、神の愛の具体的な姿、かたちです。さきほど引用したピリピ 2:6 に「キリストは、神の御姿」つまり「神のかたち」と言われています。別の箇所でもキリストは「御子は、見えない神のかたちであり」コロサイ 1:15 と言われています。「見えない神の見えるかたち」と言って良いでしょう。「神の愛」は、ベツレヘムの町に、赤ん坊となってやってきました。ナザレの村で育った「神の愛」は、ヨルダン川でバプテスマ（洗礼）を受け、人々を教えました。人々はその声を聞き、その奇蹟を見ました。「神の愛」の足跡は、イスラエルのいたるところに残っています。「神の愛」は、決して漠然としたもの、ぼんやりとしたもの、実体の無いものではありません。弟子たちは「神の愛」をその目で見、その手でさわり、その言葉をその耳で聞いたのです。

そして、この「神の愛」は、人々を救うために、自ら十字架で死なれました。この十字架にこそ、神の愛があります。聖書はこう言っています。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」ヨハネ第一 4:9-10

聖書は十字架を指さして、「ここに愛がある」と言っています。ある人が、「神の愛はハートの形ではない。それは十字架の形をしている」と言いましたが、ほんとうにその通りです。

「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」と御使いは歌いましたが、ここには、もうひとつの歌われていない「愛の歌」があります。それは、家畜小屋の飼葉おけにやすらかに眠る赤ちゃんです。世の中に赤ちゃんを怖がる人がいるでしょうか。いいえ、誰ひとりいません。赤ちゃんは、自分では何一つできないのに、あらゆる人を惹きつける不思議な力を持っています。赤ちゃんは、自分に近づいてくる人の心を和ませることができます。そのように、「神の愛」は人となって、誰もが恐れなく近づくことができるお方となってくださいました。もし、皆さんの中に復活して栄光のうちにおられるキリストが畏れ多くて近づきにくいと感じる方があったなら、まず、赤ちゃんのイエスに近づいてみてはどうでしょうか。

今日は久しぶりに聖餐式の時を持ちます。イエスがベツレヘムに生まれ、飼い葉桶に寝かせられたということを思い巡らすとき、聖餐のことに思いを馳せます。「ベツレヘム」という町の名前には「パンの家」という意味があります。イエスが寝かせられたのは、家畜のエサ箱でした。赤ん坊のイエスは、ベツレヘムの町の飼い葉桶に、まるで食べ物のように置かれたのです。実際イエスは、信じる者にいのちを与える食べ物となってくださいました。父なる神は、人々の救いのために最愛の御子を、死なせるという決断をされ、それを実行されました。御子イエスもご自分を与えつくされました。この神の愛の決断、御子の犠牲は、どんなに時代が暗くなろうとも、救いの光、救いの力を失うことはありません。時代が暗くなればなるほど、この愛の光は、よりいっそう輝き、信じる者の救いと喜びとなるのです。おひとりびとりが、このクリスマスに神の愛を見出し、その愛に生かされ、その愛に憩うことができますように。祈ります。